

翌朝はクレルモンからパリへ、一行の各人は夫々の回想を抱いて、火山の黒土から白聖の

都へ、汽車の走るまゝに運び込まれた。

(完)

伊太利とくろく (三三)

瀧川 規一

〔フ市の畫僧バルトロムメオの習作時代〕 畫僧バルトロムメオが信仰に専念せんと欲して畫筆を執ることを一旦斷念したが高僧の勸誘によつて再び筆を執り始めたのは一五〇四年であつた。この年はラファエルがフロレンス市に來て畫僧の「最後の裁判」の繪に感心した年である。ラファエルは筆者の畫僧を探し出してその美しき繪具の秘訣を學び油の使用法を習得せんと欲した。ラファエルの描いたものにこの畫僧の影響を看取し得る所以は其處にある。例へばペルチア市のサン・セヴェロ (San Severo) 寺にある

ラファエルの壁畫及びフ市サンタ・アントニオ (S. Antonio) 寺にあるマドンナ像の如きは慥にその影響を看取することが出来る。木炭を用ひて下繪を描くこともラファエルはこの畫僧から學んだのである。反之、畫僧も亦ラファエルの影響を受けた。例へばフ市サン・マルコ寺の熱烈なる説教僧サヴォナロラの獨房の「基督を抱くマドンナ」は畫僧の筆になるものであるがこれを獨乙のミュンヘンにあるラファエルのカサ・テムピ・マドンナ (Casa Tempi Madonna) に比較して見る時畫僧が受けた影響を知ることが

出来る。

レオナルド・ダ・ヴィンチは當時フ市の公會堂の壁畫に従事してゐた。レオナルドはフ市に於ける多くの藝術家に影響を與へた。その影響を受けないものは殆どないと云つてよい程である。バルトロムメオの藝術の發達の第二期はレオナルドの影響によつて始まるのである。この期に屬するものを擧ぐればフ市のサン・マルコにある「十字架上の基督」及びそのドームの天井繪がある。この天井の繪では基督とその弟子達を描き弟子達のうちに僧院主及び修業僧の顔を加へてゐる。今日バレストアインのエムマウス(Emmaus)にあるフラ・アンゼリコ(Fra Angelico)の筆になる有名な「基督とその弟子」の主題を繰り返へしたものであると云はれてゐる。一五〇八年にはラファエルは羅馬に去つてフ市に居らなくなつた。この頃バルトロムメオも亦ヴェニスに行つた。ヴェニスではデオヴァンニ・ベリニ(Giovanni Bellini)及びチチアン(Titian)またはギオルヂオネ(Giorgione)などが

伊太利ところぐ

描いたマドンナその他の畫は未だ繪具が生新しくあつた。バルトロムメオは同行の彫刻家パツチオ(Baccio da Montelupo)と共にこれ等の新しき繪を見て廻つた。ヴェニスに滞在中に畫僧はムラノ(Murano)町にあるサン・ピエトロマルチン(San Pietro Martire)寺のドミニク派の僧から禮拜所の祭壇の背後に於ける爲めの繪を依頼された。畫僧は潤筆料として其の一部分前金二十五フロリンを受取りまた繪具料として三フロリンを受取つたが殘餘の百フロリンは繪の出來上つた時に貰ふ約束をして置いた。修道院ではその百フロリンの金を調達するに苦んだ。この修道院にはシエナの聖カザリン(St. Katherine)の眞筆の書簡が收藏されてゐた。寺僧はこれを賣却して百フロリンを調へる積りでゐた。バルトロムメオはフ市に歸るや否や製作にとりかかつた。繪は出來上つたがムラノの修道僧は約束の金額を作ることが出來ない。畫僧は完成した繪を友人のパニニ(Panini)に與へた。パニニは自分の故郷ルッカ(Lucca)の町の

サン・ロマンノ (San Romano) 寺に寄附した。今日ルッカに行けば「天の父を拜む聖カザリンとモーダリンのマリア」の繪を見ることが出来る。全じく畫僧の筆になる「洗禮のヨハネと聖ステファンとを兩傍に控えた玉座の聖母」も亦ルッカで見ることが出来る。手に勝利の象徴である棕櫚の葉をもち殉教者を迫害した石を頭に戴いてゐるのが聖ステファンである。聖母の頭上には天使が空に飛んで王冠を支持してゐる。玉座の階段下には愛くるしき少天使が樂器を弾じてゐる。天使が王冠を支持する考案はラファエルのマドンナ・デル・バルダッキノ (Madonna del Baldacchino) と題するマドンナにもある。階段下に彈琴の少天使を描くことはヴェニスにあるペリニのマドンナにもある。畫僧はこれ等の繪によつて暗示を得たものであらう。これ等の暗示に加ふるにレオナルドの明暗法を利用し自己獨特の豊富なる色彩をもつてした。

ラファエルが感心したと云はれる既述の「最後の裁判」の繪は畫僧の才能を充分に發揮した

ものであつて、全時に中世的構想と近代的畫風の連鎖をなすものである。タスカニの初期の畫家等はこの中世的構想を示した。然るに畫僧のこの繪は羅馬のヴァチカン宮にあるラファエルの「論争」(Disputa) に至る方向を示してタスカニの初期の畫家等の作風とラファエルの畫との中間を示すものである。新舊兩派の境に立つた畫僧には更に一大進出を促すものがあつた。それはレオナルドの影響である。人物を描くに抽象的な型を描き明暗を科學的に取扱ひ構想を大にした點は全くレオナルドの影響である。斯くして畫僧は近代畫家の代表的先驅者たらしめたのである。

一五〇九年には畫僧は友人マリオット・アルペリチネリ (Mariotto Albertinelli) と提携して再び畫房を開き製作に従事した。兩人は各自己の作品を區別する爲めに、別々に描いたものには別々に自己の署名をなし合作したものには二つの輪の間に十字を描いて署名となした。畫房を解散する時には利益の全額を兩分することを

契約した。サン・マルコの院主は彼等に必要なる材料を供給した。やがてレオナルドもマイケル・エンゼロもラファエルも三人共フ市を去る日が来た頃にはバルトロム・メオはフ市の人氣を獨占した。従つて多くの注文が殺到した。この時期に屬する畫僧の畫でフ市で見られるものにはサン・マルコ寺にある「聖母と聖徒」の繪及びピチ美術館にある「聖カザリン」の繪である。其の他の土地では英國ハートフォードシア(Hertfordshire)の今日・バロン・ルカス(Baron Lucas)の所有地である・バロン・クインボロ(Baron Queensborough)の田舎の館であつた・パンスハンガ(Panshanger)には畫僧の筆になる「基督の一家」と題する繪があり、巴里のルーヴル美術館には「聖カザリンの結婚」の繪がある。また佛蘭西の・ベサンソン(Besançon)の町にある伽藍には「天使及び聖徒等が拜む光榮の聖母」の繪がある。以上何れもこの時期に屬するものである。

これ等の作品に於てバルトロム・メオは文藝復

伊太利とこころへ

興期の特徴をよく表はし構圖に於ては左右均齊の配置をとり人物に於ては解剖學の知識を活用し明暗を示す光と陰とを充分に辨へ、特に人體の構造に注意を拂ひ模型を巧に利用したのである。然るに惜しいことには畫僧は強くひき立たすことを欲し且つレオナルドの描いたやうに形體の丸味を作らんと欲して骨灰と印刷用のインキを用ひた。それが爲めに彼の初期の作品に見るが如き美しき色彩を破壊して了つたのである。友人との合併事業の畫房は一五・一二年に解散し三ヶ年間に儲けた四百五十フロリンの金を二分して一半をマリオットに與へた。

熱狂僧サヴォナロラの生前中に、バラッ・プブリコ(Palazzo Publico)に公會堂が建設された。メヂチ家は一時フ市から追放された。修道僧のフラ・チロラモ(Girolamo)はフ市を自由市たらしめんと欲した。その希望を現出せしめんとして「基督をフ市の王たらしめよ」と云ふ叫び聲が街頭に聞え始めた。この頃にバルトロム・メオは公會堂の祭壇の背後の裝飾畫を描くこと

を市の知事から依頼された。畫僧はこれを神の出現を紀念する好機なりと思ひ悦んで囑に應じ製作に従つた。今日ウフィツチ美術館で見られる「聖アン及びフ市の守護神たる十人の聖徒と共にフ市の自由を祈願してゐる聖母」の繪がそれである。この繪は褐色の單彩で下繪である。この繪の完成せぬうちにフ市には再び革命が起りメヂチ家はフ市に復歸し再び君臨することになつた。修道僧が抱いてゐた自由市の理想は全く破れた。

〔畫僧フラ・バルトロムメオの羅馬行〕先に羅馬に行つたラファエルはフラ・バルトロムメオに羅馬に來ることを勧めた。畫僧は羅馬のドミニク派の僧院でフラ・マリアノ・フェッチ(Maria Mariano Fetti)の客となつたがマラリアに罹つて二ヶ月滞在の後に羅馬を去りピアン・ヂ・ムニオネ(Pian di Mugnone)にある同派の寺院に附屬する田舎の病院に入るべく餘儀なくされた。その後二年間は益健康が衰へ、マラリアの熱が屢再發した。然し繪筆の活躍は益劇しくピ

チ美術館に於て見られる大規模の聖マークの像を描いた。これは羅馬ヴァチカンのシステナ(Sistina)祠堂にあるマイケルエンゼロの「豫言者の群」を見て暗示を得たものである。次に畫僧は「聖セバスチアンの裸體像」を描いた。この繪は一時サン・マルコに掛つてゐたが物喧しい修道僧等がその裸體に難癖をつけたので佛王に賣却された。また今日ルーヴルにある基督の降誕を天使ゲブリエルが聖母に告げる所謂「生誕告知」の繪及び羅馬のヴァチカン宮側の伊國王宮クイリナル(Quirinal)にある「使徒ピータとポール」の繪を描いた。次にルッカのサン・ロマンの僧院の囑に應じてマドンナ・デラ・ミゼリコルヂア(Madonna della Misericordia)を大形の布に描いた。この繪は婦人及び小兒の群が聖母の青色のマントルの下にかくれ崇拜者の群に交つてゐる繪である。美しいので喧傳されてゐるものである。然しマイケルエンゼロの彫像的な偉大さを畫布に於てあらはさんと試みたが爲めに初期の作品に見られたやうな雅美と優美

の魅力を殺いでゐる。

勢力主義の畫僧も餘りに不斷の努力を續けたので健康を害し一五一年には前に行つたピアン・ヂ・ムニオネの村に轉地保養をしなければならなくなつた。保養中にも筆をとつてサン・マダレナ (San Maddalena) の僧院の爲めに「基督生誕の告知」の圖を描いた。保養地からフ市に歸る途中父親の故郷であるスフイニヤノ (Suffignano) の村に立寄り貧しき親族の人々の家に止宿してゐる間に國王フランシス (Francis) 一世から招かれ是非國王の宮廷に來たれと懇請された。然し彼は自己僧院の仕事に忙しいとの理由を以て國王の招聘を固辭した。法王レオ (Leo) 十世がフ市を訪問し聖アントニオを聖別する式が行はれる日が來た。これを記念する爲めに畫僧はアントニオ大僧正の葬式を描いた今日英國バンスハンガで見られるものがそれである。法王自身がバルトロムメオの畫の愛好者であるのを知つたサン・マルコの院主は畫僧の描いた基督生誕の小品を贈つた。其他今日諸方

伊太利ところぐ

で見らるゝ小品物はこの頃の晩年の作である。ピチ美術館又はサルバトル・ムンヂ (Salvator Mundi) の肖像を描いた大作がありこれは金持の商人サルバトル・マリ (Salvatore Billi) の爲めに描いたものである。ウフイツチ美術館には「豫言者ヨブとイザイア」の繪がある。ナポリには「聖母の昇天」の繪がありヴェインでは「聖母が寺院に入る」時の圖がある。ピチ美術館には「基督の屍體を十字架から降ろす光景」の繪がある。小品の「マドンナと基督の首」の繪を畫僧はフェララの公爵夫妻に贈つて居る。ピアン・ヂ・ムニオネに暫時休養した後再び筆を執り「基督がモダリンのマリアに姿を現はした光景」を描き、また「刀傷を受けた僧衣のサヴオナロラの像」を描いた。サヴオナロラのこの繪は畫僧が靈の師に献げた最後の記念物である。やがてフ市に歸つたが發熱し數日の患にて畫僧は遂に仆れた。時に一五一七年の十月の六日であつた。

〔フ市の代表畫家サンドロ・ボチチェリ〕(一四

四四—一五一〇）ラファエルは萬人好きのする即ち素人好きのする優和なマドンナを描いた然し評家は畫家の個性が顯著に現はれて居ないと云ふ。然るにボチチエリに至つては十九世紀の後半に於て英國の評家及び學者の興味を復活しラスキン（*Ruskin*）の如き或はペータ（*Pater*）の如き文壇の巨頭が名筆を奮つてボチチエリを賞揚した。吾邦に於てもボチチエリの研究によつて名を成した人がある。ボチチエリは生前中にフ市隨一の巨擘として喧傳されたが十七八世紀に於てはレオナルドやマイケルエンゼロの名に眩せられた貴族貴婦人等は彼の畫を左程珍重しなかつた。これはその時代の人々の趣味嗜好の變化によるものであるが、前世紀の學者評家等はラファエル以上にボチチエリを持ち上げた斯くまで魅了した彼の繪にはどんな特徴があるのかと今更ながら好奇の眼を向けしめる。フ市に於て窺ひ得るボチチエリの繪によつて自らもその所以を納得する機會が與へられた。

こゝにボチチエリを以てフ市の代表的畫家な

りとする所以は既に述べた如く藝術界の三巨擘たるレオナルドもマイケルエンゼロもラファエルも皆その全盛期を他の都市に送つて再びフ市には歸らなかつた。レオナルドはフ市からミラノ市に去つて佛蘭西で死んだ。マイケルエンゼロはフ市の人物と云ふよりは寧ろ羅馬の人であつた。その最も有名な畫は多くヴァチカン宮に於て見られると云ふ状態である。ラファエルも亦羅馬に去つた。然るにボチチエリに至つてはその生涯の殆ど全部をフ市に過した。フ市の黄金時代の精神に感應してこれを諸種の繪に表現した。フ市の父であると云はれてゐるコシモ（*Cosimo*）の時代に生れその偉大なる孫ロレンツォ（*Lorenzo*）の寵を受けメヂチ一門の全盛時代と一時の政變と回復とを経験し事變を記念する爲めに筆を執つた。メヂチ家に集つた人道派の哲學者詩人等が醸成した古典興味の雰圍氣にあつては古典神話を畫題にし詩人等の作つた詩の内容に暗示を得てこれを畫布その他に表現した。古代熱及び自然美は自ら彼の畫面に現はれ

ダンテ研究の興味が復活した時にはまたその興味が彼の作品に表はされた。哲學者等がブレートの哲學と基督教との調和を試みた時に當つては彼の描くマドンナはその影響をうけて純眞なる宗教心と人間の深き情味とを裝飾的な美しさを以て表現した。怪烈なる説教僧の聲を聽いては彼は基督と修道の爲めに晩年の藝術を献げた然かもその描く何れの繪も力強き獨創性を表はし従つて畫家の個性を發揮し以て何人も彼の繪は彼の繪なりとて他と混同し得ない作品を遺してゐる。さてこそ彼を以てフ市の代表的畫家なりと云ふ所以である。

摘 録

○北海道に於ける第三紀火山活動の時期

帝國學士院學術研究獎勵資金及事業便覽(昭和七年度)所載
田上政敏氏北海道に於ける第三紀火山活動の層位學的研究
北海道に發達する新生界の分類は次の如し。

一、石狩統 (古第三紀層) 火山活動停止期

二、幌内層
川端層 (新第三紀層)
追分層
遠別層
後期火山活動時代

三、瀧川層 (洪積統)
月寒層
第二期安山岩

四、河成段丘層 (沖積統)
火山解析時代

幌内時代 新第三紀層の基底は必ずしも幌内層でなく石狩の標準幌内層の分布は著しく制限されてゐる。幾春別川より登川に至るものを代表的幌内層とすれば遠別幌内層之に最も近く、雨龍、オピラシベツのものは甚だしく性状を異にし、南方邊富内のもの亦同じい。増幌、浦幌、樺太に點在するものも特徴を異にする。是等各地の所謂幌内層は石狩の上部幌内層に最もよく似て居るが、川端層の下部にも似てゐるから何れを代表するか疑問である。幌内層下部は石狩統後の海侵の結果形成されたのであるが北海道には局部的に分布してゐる火山噴出物が殆ど無い。然るに幌内上部層に於て初めて著しい火山噴出物が増加し、凝灰岩を介在する。

川端時代 幌内層上部層と川端層との區別は石狩地方では明瞭であるが、其以外の地域では區別判然せぬ、是等を總合し中間層又は幌川層と呼ぶのが都合がよい。この中間層は道内に廣く發達し、先幌内層を不整合に被覆し著しい海侵を示す。殊に火山地域では之と前後して活動した火山岩及び其の碎屑物が著しく發達して居、千島火山帯、天鹽火山地、渡島